
聖のかけがえのない1日の始まり（永遠のラブストーリー番外編）

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖のかけがえのない1日の始まり（永遠のラブストーリー番外編）

【Nコード】

N5979T

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

永遠のラブストーリー〜新婚編〜の番外編です。今回は短編で。聖と桃子の、とある日の朝の出来事です。ブレイクタイムって感じで、軽い気持ちで読んでくださいませ。

（前書き）

ちよつと、とある1日の朝の出来事を、聖目線で書きたくなっちゃいました。気軽に読んでください。あまり、本編のストーリーとは関係ありません。

なんだ？ほつぺたがくすぐりたい。何かが当たってる。ふわ、ふわって。なんだっけ？これ、なんだっけ？

パチ。目が覚めた。ああ、桃子ちゃんの髪だ。それに、すうってかわいい寝息も聞こえる。

外から雀の鳴き声が聞こえる。カーテンの隙間から、朝日が差し込んで。ああ、朝だ。

えっと、今日は何曜日だった？ああ、そうだ。土曜日だ。大学が始まって、土日のバイトは夜だけになったんだっけ。

桃子ちゃんも学校休みだし、なんだ、もつとゆっくり寝ててもいいんじゃない。

「う…ん」

あれ？桃子ちゃん、起きた？

「聖君」

「うん」

「はあ…。胸キュンだ」

「は？」

桃子ちゃんの顔をのぞいてみた。なんだか、にやけてるし、頬が赤く染まって見える。でも、しっかりと寝てる…。寝言だ。

また、寝言だ。桃子ちゃんは寝言多いんだよね。それにしても、胸キュンって何？俺にもしかして、ときめいてる夢？

まったく。かわいいんだから、どんな夢だよ。

じつと桃子ちゃんを見た。桃子ちゃんって絶対に、赤ちゃんの時と同じ顔で寝てると思う。かわいくてあどけない。

桃子ちゃんって、ほんと、色が白いだよね。だから、赤くなる
とすぐにわかる。

そつとほっぺたにキスを試みた。ああ、柔らかい。かわいい。
なんつうの？マシユマロみたいな感じ？

それから、そつと唇にもキスを試みた。ふわ。ああ、唇も柔ら
かい。

なんでこうも、やわらかくって、あたたかくって、かわいいんだ
ろうか。駄目だ。眠れそうにない。このまま、じつと桃子ちゃんを
見ていようかな。

手、小さいんだよね。すげえかわいい。指は細くて、やっぱり色
が白くって。だけど、掌はピンクなんだ。触るとやっぱり、柔らか
いんだよね。

それに爪もピンク色してるんだよね、小指の爪なんて、めっちゃ小
さくてかわいいんだ。あ、そうだ。足の爪もかわいいんだよね。

鼻もかわいいんだよね。小さくもなく高いわけでもない。あまり
主張もしていないし、だからといって、目立たないわけでもない。
ぐにつつまみやすくてかわいいんだ。だからつい、つまんで
しまう。

桃子ちゃんのまつ毛もかわいい。くるんってしてるんだ。それか
ら眉毛は、濃くもないし、そうだな。どっちかっていったら、薄い
ほうなのかな。眉毛の色も、髪の色と一緒に、ちよつと茶色いんだ。
目を閉じてるから今は見えないけど、瞳も茶色いんだよね。

桃子ちゃんは嫌がってるけど、そばかすも俺はかわいって思っ
てるし、ほくろまでかわいいんだ。お尻にあるほくろなんて、見つ
けた時には、俺、まじでかわいすぎるゝって、感激したくらいだ

もんな。

やばい。お尻のことは思い出さないほうがよかったかな。今、ちよこつとムラッてしちゃった。寝込み襲ったらさすがに、怒られちゃうって。

いや、怒らないかな。桃子ちゃんってほんと、怒んないもんな。

ああ、桃子ちゃんが起きたら、朝からいちゃついていようかな。駄目かな。いいよね？早く起きないかな。

「うん…」

あれ？寝返りうつちゃった。

まあ、いいや。桃子ちゃんの背中、抱きしめちゃおう。むぎゅ。

ああ、肩も小さくって、かわいい。胸は柔らかい。妊娠して、まじでどんどん大きくなってるよね。もつとでっかくなっちゃうのかな。

「聖君」

「え？」

ドキ。起きた？

「寝込み襲わないで」

「はい」

俺は胸から手を外した。

「すう…」

すう？あれ？まさか今の寝言？って、じゃ、どんな夢を見てるんだよ。

ああ、寝込みを俺が襲ってるって夢か。まさに、今の状況と同じじゃん。

「聖君」

「え？」

これも寝言かな。桃子ちゃんの寝言ははっきりしてるから、起きてるのかどうかの区別がたまにつかない。

「そんな目で見ないで…」

ど、どんな目？

きつと、俺に迫られて、俺に熱い視線で見られちゃって、それで、結局は抵抗もできず、俺のえじきになっちゃうって夢だ。

うっっん。その夢を途中で中断してもいいものかどうか。俺からしてみたら、夢の中の俺に襲われちゃうよりも、俺本人に、襲われてほしいんだけどな。

ま、いいや。寝てても。

って、俺はまた、桃子ちゃんに抱きつき、うなじにキスをした。

うわ！桃子ちゃんから、かわいい甘い香りがした。う、桃子ちゃんフェロモンだっ。

やばい。

ムズ。

非常にやばい。

ウズ。

桃子ちゃんの背中、かわいすぎる。それにお尻も、かわいすぎだよ。どうして、寝姿がこんなにもかわいいんだよ。足も、腕も、全部がかわいいじゃんかよっ。

ちよっとお腹が出てきたけど、それすらかわいく見えてしまうから、不思議だ。

スル…。こら、俺の手、勝手に桃子ちゃんのパジャマを脱がそうとしないの。う、我慢、我慢。

だから…。なんで、パジャマの上着の中に、手、入れてるかな。こら。こら、こら、こら。

ああ。やばい。胸、柔らかくって、あつたかくって、気持ちがいい。

っていうか、どうして桃子ちゃん、ブラしてないんだよ〜〜！

あれ？昨日もしかして、俺脱がせた？

いや、昨日はちゃんと、おとなしく寝ましたよ？俺も、桃子ちゃんも。

あれ？じゃ、ブラつけないで寝たの？桃子ちゃんってば。え？どうして？忘れただけ？

もしや、その気があったとか。なのに俺、それに気が付かないで、寝ちゃったとか。

昨日の夜は、一緒に風呂に入って、えっと。確か、体を拭いてあげたけど、そのあとは、先に俺、出てきちゃって。そうそう、お父さんが風呂から出たら、何やら話しかけてきて。意気投合してそのまま、1時間くらい話してて。

で、部屋に行ったら桃子ちゃんは、もう髪も乾かしてしまつて、日記も書き終えてて、すっかり寝るだけになつてて、で、俺の髪が乾いて、風呂の日記を書いてる間に、寝ちゃってたんだっけ？

もしかして、怒ってた？いつの間にか寝てたけど、あれ、ふて寝だった？なんだよ、寝ちゃってるよ、かわいいな、なんて勝手に俺、浮かれてたけど、もしかして、怒って寝ちゃったの？

むぎゅ。

え？！なんで、俺の手、握ってきたの？それも、俺が桃子ちゃんの胸を触ってる上から。あ、もしかして、振り払うつもりで、かな？
「聖君の手……」

「う、うん」

あ、胸触ってるから、怒った？

「大きい」

「へ？」

今のも、寝言？！

「すう…」

だね。今のも寝言だ。

桃子ちゃん、俺の手から手を離れた。なんだったんだ、今のは。
ああ。それにしても、風が生まれたら、この胸、風のものになっ
ちゃうんだよね。なんか、ちょびつと寂しい。

「聖君…」

また寝言か…。今度は何かな？

「なんで胸、触ってるの？」

「え？」

「朝から、襲わないで」

「…」

あれ？今のも寝言？それとも起きた？

「桃子ちゃん？」

「うん」

「起きた？」

「うん」

「おはよう」

「おはよう」

桃子ちゃんはまだ、背中を向けたままだ。って、俺が抱きしめて
るから、動けないでいるのか。

それに、襲わないでと言いつつも、なんの抵抗もしてこないじゃんか。

俺はそのまま、桃子ちゃんを抱きしめ、胸を触っていた。

「聖君？」

「今日、土曜日だね」

「うん」

「ゆっくりしててもいいよね？」

「うん」

「じゃ、いちゃついていようね」

「へ？」

「もうちょっと、こうやって抱きついてていいよね？」

「…でも」

「うん」

「…」

「なあに？」

桃子ちゃんは何かを言いたそうにしている。

「う、うずいちゃうから、やっぱり駄目」

「え？」

そうなんだ。ウズってしてるんだ。俺と一緒にじゃん。

「じゃ、このまま、俺に抱かれちゃって？」

「え？朝から？！」

「うん」

しゅん。あれ？黙った。もしや、桃子ちゃんもその気、とか？
それとも、思い切り呆れてる、とか？

「聖君」

「ん？なに？」

「昨日、私が先に寝ちゃって、怒った？」

「俺？いいや、なんで？」

「聖君、もしかして、その…」

「ああ、桃子ちゃんと昨日も抱き合いたって、思ってたと思った？」

「うん」

「そうだな。でも、俺がお父さんと話して、盛り上がったんだし、桃子ちゃんが先に寝ちゃっても、怒ったりはしなかったよ。っていうかさ、桃子ちゃんが怒っちゃってたんじゃないの？」

「私？」

「俺がなかなか部屋に行かなかったから」

「怒ってないよ。でも、寂しかったけど」

「そうなんだ」

ああ、なんだよ、かわいいな〜。

「で？」

「え？」

「抵抗しないのは、いいの？OKってこと？」

「え？」

「胸、触っても抵抗しないじゃん」

「…」

あ、また黙っちゃった。これ、いいってことかな？顔が見えないと、わかんないんだよね。

うなじにキスしてみた。あ、何も言ってこない。いいの？いいってこと？

ちよつと顔をあげ、桃子ちゃんの顔を覗き込んだ。すると、桃子ちゃんがこつちを見てきた。

うわ。なんだよ、すげえ、色っぽい目で見てるじゃん。それ、誘ってるの？

それ、OKってことだよな？っていうか、もうそれしかないっしょ！

桃子ちゃんをこっちに向かせて、思い切りキスをした。やっぱり、そうだ。桃子ちゃん、無抵抗だ。

あれ？じゃあ、もしかしてあれだ。桃子ちゃんの夢、正夢だったんだ。

俺に、寝込み襲われる夢。今、そうなっちゃってるもん。

桃子ちゃんに腕枕をした。桃子ちゃんは俺の胸に顔をうずめてきた。ああ、これ、好きなんだよね。髪がほっぺに触るけど、それにくすぐったくって、桃子ちゃんが瞬きをすると、胸にまつ毛が触って、それもまた、くすぐったいけど、それも全部、愛しい。

「だ〜っ！」

「え？何？」

「桃子ちゃん、キスはやめて。それはさすがに、くすぐったすぎる！」

「駄目？」

「うん。その辺、弱いからやめてね」

「どこならいいの？」

「どこって」

ていうか、何？なんで俺の胸にキスしてきたわけ？それもいきなり。

「胸とか、脇とか、その辺は駄目」

「お腹は？」

「へ？お腹？！」

「背中は？」

「…」

「聖君って、首も弱いでしょ？」

「う、うん」

「じゃあ、鎖骨は？」

待って、待って。何言ってるの？それ、俺のこと襲ってきたいてこと？それに鎖骨にキスって？え？俺の鎖骨にキス？！

駄目だ。頭くらくらしってきた。どうしちゃったんだ、桃子ちゃん。

「えっと、どうしたの？桃子ちゃん」

「え？」

「変だよ。なんでそんなこと聞くの」

「…だって」

「うん」

「だって、聖君のこと」

「うん」

「愛したいんだもん」

へ？！！！

「私からも、愛したいの」

ままま待って。今、かなりの大胆発言をしますけど？

それから、桃子ちゃんが俺の上に乗っかってきた。え？？なんで？

「桃子ちゃん、何？」

桃子ちゃんがキスをしてきた。

「ど、どうしたの？」

「聖君…」

「うん」

「大好き」

「う、うん」

「聖君、愛してる」

「うん」

「聖君」

「うん」

「起きて」

「へ？」

「もう、8時になっちゃった。起きて」

「え？え？え？」

パチ。

あれ？！あれれ？！

桃子ちゃんが、俺の顔を見て、にっこりとしている。

「え？あれ？」

「やった。初めて、私が聖君のことを起こした」

「え？」

「ぐっすりと寝てたもんね」

「夢？」

「ああ、なんか、寝言言ってたね」

「なんて？」

「うんうんって、うなづいてみたり、ええ？って驚いてみたり。い

つたい、どんな夢？」

「夢~~~~？！~！~！~！」

「？」

桃子ちゃんが、きょんとしている。

「あれ？何？桃子ちゃんの夢が正夢になるって、それを夢見てたの？」

「私の夢？」

「何？今までの全部夢？！」

「？」

桃子ちゃんが、またきょんと首をかしげた。

「桃子ちゃん」

桃子ちゃんの胸をパジャマの上から触ってみた。あ、ブラしてる

…。

「な、なあに？」

桃子ちゃんが恥ずかしがって、胸を手で隠した。

「桃子ちゃん、その…、今日って土曜」

「うん」

「だから、その、もう少しいちゃついても」

「もう8時だよ？」

「でも、桃子ちゃんのこと、今から抱いても」

「ええ？あ、朝だよ？今」

あ、真っ赤になった。

「俺のこと、襲いたくなったりしない？」

「私が？！」

あ、声が裏返った。

「俺の背中や、胸や、鎖骨、キスしたくならない？」

「な、なるわけないじゃん！何を言ってるの、もう…。今日は私のほづが、先に一階に行っちゃうからね」

そう言つと、桃子ちゃんはベッドを降りて、服を着替えて、部屋を出て行ってしまった。

「夢？」

なんつうリアルな、長い夢だったんだ。だってさ、夢の中で確かに、抱き合つてたんだよ？ あつたかつたし、桃子ちゃんの肌のぬくもりや、感触もしっかりあつたし、キスだって。

「夢だった？」

なんだよ。

ああ、でも、あんなふうに迫られたら、俺、まじで焦りまくるかも。

いつか、そんな日が来たりするんだろうか。

いや、こないかもな〜。

がっかりしたんだか、嬉しかったんだか、残念なんだか、ほつとしたんだか、それすらわからないまま、今日も1日が始まったのでした。

う、でもやつぱり、かなり残念。夜は思い切り、いちゃついてやる〜〜〜！

（後書き）

本編も、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5979t/>

聖のかけがえのない1日の始まり（永遠のラブストーリー番外編）

2011年7月16日03時35分発行